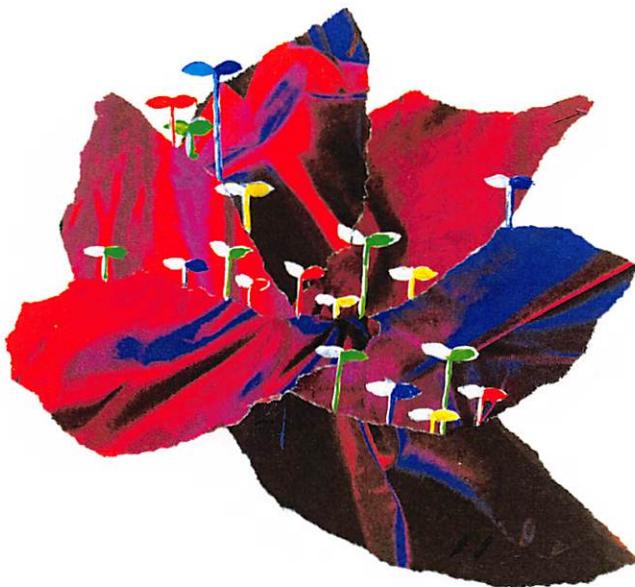


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 3



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

二〇二三年三月号 (通巻七七八号)

◇ 寄稿 ◇
久我田鶴子著『短歌の「今」を読む』をどう読んだか
阿藤たつる
小林さゆみ 49

◇ 今月の二十首詠 …… 万年青

善学登志子・横田敏子他 箕浦 勤 2

矢口さた他 4

安田明子他 20

山川弘美他 52

紺野絃史他 78

鈴木文子・高橋啓子他 64

林 耕作・熊谷 操 40

熊谷とも子 14

久我田鶴子 17

金近敦子 18

久我田鶴子 16

久我田鶴子 16

◇ 春のアンソロジー 〈光と陰〉
私と短歌との出会い (247)

◇ 月号作品批評
「調べ」って何?

■ 歌壇月旦
一月号作品批評

A……田土成彦・野玉 幸
B……大寺智子・山崎昭子
C……茂木 毅・近藤栄昭

伊東ミイ子
仲西正子

70 62

50 49

■ 作品[A]

A C B A

● 追悼・中島義雄
中島義雄作品三十首 ●

田土成彦・本元由美子・片山幸子
黒瀬紀子・渡辺徳子・石田明彦

34

第17期オリーブ集メンバー発表
クリップ……92 神田通信……表3

69 63

万年青

箕浦 勤

一九五〇年生まれ。
藝グループ所属。
第一歌集『酒匂川越ゆ』。

わが庭に万年青の赤き実の立ちて母の手植ゑの甦りくる

冬の夜の五徳の上に鳴る薬缶母は熾火に灰を寄せるき

三越へ母と行きけり仰ぎみる天女の像の真新しき頃

どこからか縁紅弁慶仕入れきて父はたつぶり水を注ぎつ

祖父の声のわが声となり聞こえくるありありとして響くその声

山芋の黄葉すれば山桃の木に抱きつける姿のあらは

採る者の無きまま柘榴の実の割れて禁忌のやうな赤き粒粒

この柿たぶは幾度も体を伐られけむ瘤瘤瘤の武骨なる幹

無花果の若木は実り損ねしを汝には次もまた次もある

進めば啼き振り向けば止む濁声の鴉は高き電柱の上

ガアガアと喧嘩売られて忌々し人の世だけで手一杯なり

柔らかき鳥賊の体に隠されて鳥鳶と呼ばるる銳利

蟠蟻にバッタは食はれて首筋よりバッタの形消えてゆくなり

一押しで染みとなるべき小さき虫せつせと動けば潰しがたかり

オブラーートのやうな薄皮脱ぎ捨てて飛蝗は凜凜し狭き籠にも

陋屋の納戸の闇より飛び出づる黒き魔物よ名は竈馬

氣懸かりはマスクの時代の若人の表情筋の発達不全

検温の効果やいかにとりあへず電子踏絵に額を晒す

古稀を過ぎて日々の隙間にひよいと出る悔恨と言ふ御し難きもの

歌を詠み酒を愛せし師の住処酒林と言ふ相模の真中

作品 A

養学登志子

俳壇歌壇

・凌

新聞の俳壇歌壇三三メモ汚れのようなよろけたる文字
俳壇歌壇行きつ戻りつ読む日曜布団の中のなごりのぬくとさ
ふうせん蔓ふと浮かび来しひとのいて遠しこの世にいなひとなる
思い出は夜ふけてふつぶつ湧き出するうつすら月のひかりのさして
好きでないひとの大顔せまり来ぬ去年の春に逝きしと云うに
苛酷なることに堪えんとするひとの後悔したくないからと笑む
二百年暮しの跡の何だつたろう更地に建ちし十二軒の灯

横田敏子

お年玉

・福

娘の家にうから集いし大晦日 会津の地酒「原藏」旨し

窓越しに遠く真白き富士の山青澄みわたる元朝の空

それぞれの一年ありてそれぞれの新たな年を踏み出だす朝

星川の杉山神社へ初詣で風なき空に風上がりおり

境内の茅の輪をぐりり神前に息を整え柏手を打つ

辿りゆくこれから先の果ては知らず悲無きこと深く祈りぬ

独り居は寂しいからと届きたる「ゴールデン・レトリバー」娘のお年玉

吉永惟昭

コロナ禍

・熊

年の瀬に室内高熱まさかまさか思いしコロナ感染入院
さしよりの入院用具届くるに「早く帰れ」と追い返されぬ
私は感染予備者ただ独り家に籠りて発熱に耐う
訪問看護も出向けませんと言いし後「軽くなる」を飲んで下さい
年古れば死亡の率も高かるに気を揉みながら解熱を待つ
年末に退院となりし家内享けこれでいいのか何もせずして
九十二迎えし春はオロオロとコロナ後遺の体で寿ぐ

山下雅子

明かり

・智

優勝の涙たたえて万歳す寛解のスイマー尊く愛し

はれやかにカズダンスおどる五十五歳まれなるシート見納めならん
パリみやげのTシャツ踊るベランダに翁寿のわれの生き生きとして
ハスキーナる九ちゃん歌う「明日がある明日があるさ」へこたれるなど
高齢者あふるる眼科にひた待てり首相には見ゆる明かりみたくて
九十年生きていいよい身に染みぬ勿体ないは戦時の名残り

スマホの人駆けくる幼児に立ち止まる日の前のポスト杖の身に遠し

山野幸司 声

・沖

市原やよひ 参道

・萬

ナベツルの雪中動く二羽の舞い湿原の空喜びの声
豪雪に人影動くいとなみも地球の隅に光る玉の緒
手の平のキャベツの苗を一つずつ大地置き行く師走の朝
苗たちの声に押されしわが耕地管理機拓くうねに植えたり
ボット苗小さく耐えしサニーレタス大地の恵み太く大きく
草の中大根葉っぱ伸び伸びと大地に根張り冬にも耐うる
草を分けネギは寄り合い歌い合う冬に大きく香りも高し

山本 本

孟

歳末の懷ひ

・大

歳末を迎へて妻のなき一年時に憶ふも多くは忘る
年賀状独りで生きると書いたものの子やヘルパーに助けられている
この一年夢にも妻を見ざりしを我は冷たき夫にありしか

そこここにパートナーなき男女あり悲しきる顔いつまでもせず
冬帽子貰ひて鏡の前に立ち似合ふかと亡き妻に声かく
亡き妻は昏睡状態になるまでにへそくりのありかを教へてくれたり
亡き妻の三回忌すんだと言えば独り身は気楽かと訊く「ばか」

磯田ひさ子

臨時ニュース

・森

まゆ玉を軒に吊せる浅草の師走の雨は芝居がかりぬ

日本をとりまく世界きな臭し防衛費とみに膨らむばかり

十二月八日のやうに突然に臨時ニュースが流れやしまひか

声高に誰も言はざり不透明感ぬぐひきれずにコロナの解除

ありがたいことではあるが仲見世に待つてましたと人ら繰り出す

怪獣に似たる名前のモンステラ事務所に五年縁を保つ

陽あたりの悪しきにクリスマスローズ白く凝れる蕾つけたり

市原やよひ 参道

・萬

年賀状終わりにすると電話来る又一つ寂しきことが増えたり
テレビより鋭き光差し来たり初日は今し昇らんとして
指示を出す止まれすすめのプラカード初詣の列整然として
健康と合格祈願のお守りと水川神社の長き参道
雜踏の中に二つの緋の袴池に映りて仲良く歩む
それぞれの願いを持てる神殿の前になるとやはり未だ動かず
返事なき手紙を今日も預け置く面会のなき病院受付

梅本武義

年の瀬

・羊

親友は逝く出す賀状の数も減る何か不安に年の瀬が来る

奥さん聞く晩年の君の日々医者嫌いは思いだにせず

年の瀬の鎮守掃除の落葉焚きコロナにかかりしことを言い合う
生き残りゲームのごとき年の瀬を花咲く枇杷に目白聞きおり
彼女はと聞けば即座に居ると言う屈託なき孫幼き日のまま
酒を酌み孫と話すに古稀を越え勤めし我をちらり出しおり
里山の鉄塔見つつ自問自答して居る我か父を浮かべて

大浪美雪

キノコ

・森

をととしの台風に荒れし境内に茶色き大きキノコキノコや

境内のヒマラヤ杉を十數本根こそぎ倒し台風去りぬ

杜に棲む鶏健在大木の倒れし間のいづこにをりしや

二抱へ三抱へもあるヒマラヤ杉丸太となりて積み上げてあり

チエーンソー起重機チップ粉碎機台風片付け三月かかりぬ

奥処まで見渡せる杜を闊歩する鶏一羽ときの声あぐ

傘の大きキノコを指して称宜さんは回復の兆し見守りたい

奥田陽子

北鎌倉

・羊

駅出すればすぐなる寺院大き寺を巡りてゆけり日射し受けつつ
山よりの湧き水という寺内の岩肌流るる水の冷たさ
いま少し創らぬ方が良からんを寺院の庭を出でて娘の声
鎌倉高校前の下車にて心急く海までの道波は見えねど
ドーンと来る波音に身はしりぞけど退く海水に手浸す幼な
靴下をぬき捨て浜辺駆けてゆく母と子われより遠くなりつ
海沿いを走る電車の停車駅腰越と聞けば親しその名は

小野雅子

冬薔薇

・羊

植ゑた人を悼みてゐるか一輪の白き薔薇さく師走の庭に
行く人の足をとどむる大輪の白薔薇さきぬ毎年の春
ワクチンの予約したまま突然に逝つてしまひぬ薔薇植ゑし人
痛くなる疲れるまでは働かぬ床の掃除もガラス磨きも
ホカロンかハリックスかを考へる冬の朝の腰の痛みに
ささやかな難事なれども一つ一つ無事に終へたり心やすらぐ
アルゼンチンにコロナはなきかパレードの車を埋むる人人人人

神田鈴子

シクラメン

・大

ワクチンの接種を済ませくつろぐに桜紅葉のひと葉舞ひ散る
怖れるし副反応はあらはれず拍子抜けなりひと日を過ぎて
日を追ひて寒さ増しゆく冬空を時折こぼるる光明るし
三ヶ月の脳トレ終へて名残り惜し果たして脳は若返りしや
物忘れ日毎増えゆくあけくれに重ねし歸しみじみ思ふ
三人が三種のケーキ作り上げイヴの夜高き孫たちの声
孫達より贈られし緋のシクラメン クリスマスの夜の華やぎとなる

菊地栄子

薑菜山

・鴎

三枚田をうすめて黒き雁の群れ 待ち望みたる愛もありしか
おちこちに少數なせる雁の群れ聞きたし丘・六羽の家族構成
一人っ子ははしゃぎすぎたり憐れにも歌つて踊つてアノを弾いて
まれまれに帰り路にあう新幹線一直線に北国へ去る
遠目にも形勝れる薑菜山崇め行けどもなお速き山
夢をみた学園祭に姪の子も入り混じりおり幼き顔に
一面に葉を散らしたる朴の木の丘のしづけさ霜月に入る

北山雪男

しかじかの間

・伊

わが子よりも若き師の下学びるて樂し 異国のことば、人、風
戦争は嘘撒き散らし燐るものナショナリズムに厚化粧して
アナログの時計懐きて仰ぎ見る半ば崩れし虹の片脚
（マイナンバー使へ、名前ハゴミ箱へ／短歌・俳句ハA-Iが詠ム）
わが目には見えぬ崖にてときをりは飛び降りたるものなるわが猫背
腰下ろし冥き空待つ歲月に押し流されて来し北の野に
悔恨の柘榴ざつくり口開きかくてかくかくしかじかの間

草刈十郎

柿すだれ

・世

長き夜や読み継ぐ書あり傍線に妻の青春見し思ひなり
すり減つた消しゴムだけが残りて消されし過去は何でありしか
朽ちるまで化粧を競ふ紅葉かな人の姿を見し思ひなり
円安の理屈聞きつつにごり酒心揺さぶることもなかりき
過疎の地の日差し集めて柿すだれあたりに人の姿なかりき
黄落の音なき庭の中にも過去も未来も語ることなき
冬日差すごみ箱漁るからす二羽生きるがための姿見るなり

國井節子 ドクターへり

・春

明けやらぬ空の彼方を音高くドクターへりは時とたかふ
病院のヘリポートの中吸ひ込まれ任務終へればトンボ返りす
明日も又今日のつづきを生きるため日々続けたり筋肉体操
まんまと水を湛ふる垂仁陵ボツンと小さき田道間守の塚
冬寒き古墳の森のさわめきて永き眠りに飽きたる塚の主
雪雲は低くたれこめ葛城の嶺は霧氷の銀のきらめき
聞きちがひ思ひ違ひに勘ちがひわざわざ違ふつもりはあらねど

河野繁子 日脚

・雁

なら林ま赤く染める空のいろひとり眺めて朝餉の支度
ぼろアパートそのまま売れし終活のすつきりとして 何を食べよう
明日より日脚伸びるを温もりに冬至の夕陽にもろ手を合わせ
ほうけたる人お氣の毒叱らぬときめしに叱る我こそ罪人
もう少し生きねばならぬ二人いて廊下に手摺の仕上がりし暮れ
令和四年棘刺ざること為政者と宗教からむが世に晒される
信金の撤退する町世の中も引き算ばかり 柳形の月

小林能子 「雪蓬瀬」

・羊

リハビリの仲間それぞれ八十の坂上り来てそれぞれ生きる
女子に伊勢崎町の老舗を守りきて気さくなる人は九十二歳
さういへば焼け跡伊勢崎町のまん中に飛行場があつたと頃くひとり
長生きしそぎたと言ふ人「まだまだ」と笑ひとばすもりハビリ仲間
大火鉢の炭火搔きあげ鉄瓶にぬる爛のかげん父仕込みなり
ひとくちの昼の盃ふくよかに映す幽かのひかり飲み干す

山は雪の寒さか恵みの「雪蓬瀬」行き合ひしそのひと口に酔ふ

近藤栄昭 茅原

・虹

棘かくす茅原うねり遡るをからだ傾け胸から進む
穏やかなスキの原に浮かび見ゆうねる波頭に道光りいる
一枝が限界試し抜け搖れる絡む山ぶどう茅原の盛り
照りを受け焼ける茅原耐え切れずみどりは褪せて秋光しいる
胸で押し腿で押し分け木々の陰素直な木々の幹に添い立つ
地霧湧きすすき湿らせ流れゆく海風柔ら脊梁こえきて
雪原に突き出るスキ風強くたれかの足あと高く残れり

近藤芳仙 羽昨

・信

降りたちし能登の羽昨のはればれと無人駅舎のタクシー乗り場
長年を想ひつづきておとづれし先師が御墓 碑石の小さし
「折口春洋ならびにその父…」心情のあふれし言葉いくたびも読む
たたかひにくるしみ死にし春洋とぞ描きしその父 くやしからまし
気多大社境内に並ぶ歌碑ふたつ 信夫親子はこもれびの中
こもれびに光りつくる水面なり「入らずの森」の奥処がゆらぐ
海近き羽昨のぬくさ市営なるバスは漁師の家家をぬふ

坂上直美 歳晩

・天

街中の小さきホテル閉ずという公孫樹もなべて葉を落とすころ
子のいねば自らの老いを自らで見つめねばならぬすと死ぬまで
「わたくしはまだ生きてます」そのことを伝えるための賀状かと思う
クリスマス小さきケーキをあがないて君が遺影の前に飾れり
富士よりも美しと思えり比叡の山初冠雪は青空に映え
十二月初春の支度を少しづつ片づけてゆく良き年よ来よ
エラン・ヴィタール／兔の年であるからビヨンと大きく跳ねていこうぜ

坂出裕子

落ち葉

・洛

公園の路の散歩に降りつもる落ち葉踏みつつひとりたのしむ
一枚も葉のなくなりし花水木まるき実かげ春を待ちをり
群れとなり川面の鳥の翔ちゆけり秋青空に点となりつ
見知らざる人なりしかと川べりの道の散歩に会釈を交はす
空を見て水を眺めて帰り来ぬコロナのこころすこしなぐさみ
川水の光るを眺め帰り来ぬ今日を生きなむちからいただき
夜半覚めて歌を思へりわれに歌与へてくれし人を思へる

篠原まり子

鎌倉

・羊

大銀杏倒れて芽吹く不思議さに八幡宮の実朝ははや
高時が血を流したる滑川渡りて幕府滅亡を知る
切通し腹切りやぐらおどろにて鎌倉案内し友は遙かに
しずやしず八幡宮の舞殿に尾上右近「静」を舞いぬ
衣擦れの音聴こゆなき舞殿におぼろの月は「静」を映す
唐突に友の姿は一葉の喪中はがきとなりて手の中
読みかえす『アルジャーノン』は白ねずみ俄の頁にビオラを挟む

柴田登志恵

まなざし

・天

金堂の回廊の端の暗がりに立ちたまひたりし百濟観音
なにげなく角廻りしがショーケースの虚像と紛れし百濟観音
三本の指にそと触れぶらさぐる百濟観音の水瓶あやふし
ひよろりとすこし猫背が似たりしに百濟観音父親しみぬ
おそらくは父と訪ひ見えしこと一度もながらむ百濟観音
壯年の聖徳太子うつしきとふ救世観音にはつかたちろぐ
焼失の壁画語りし父すでに沙漠のかなたを思ふまなざし

鈴木結志

南湖

・福

定信公「士民共樂」の理念もて那須借景に南湖をきずく
公家大名献上和歌にいろどられ南湖十七景歴史をつづる
定信公の築庭理念引きつける池泉廻遊式日本庭園
南湖神社創建の認可活動に渋沢の財と労役しのぶ
定信公お手植えざくら二百年の歴史を綴る白河の花
閑の声八聲村に明けつげる時経て思う落ち武者の里
渋沢の寄付に南湖神社の鎮座祭竜宮のこと灯がともされしとう

関根栄子

流星

・埼

生垣の山茶花の紅散りこぼる車避けつつ立話せり
この頃は残菊焼くもばかられ早々と刈られし畑の菊惜しむ
待ちている流星群も二つ三つ見れば気が済み床に入りたり
億光年の輝き届くあの星もすでに終りているかもしけぬ
何度も目かいまだに慣れぬ眼球の硝子体への注射一瞬なれど
一瞬の眼底注射も手術着に着替え車椅子に気持はひるむ
瞳孔の広がりいまだ收まらず真白に輝く道帰り来る

関根和美

ラビリンス（靈的迷路）・埼

コスモスと秋明菊を透かしつ誇うはラビリンスの淨き円形
主をめざし歩むに近づき遠ざかるわが逡巡の日々ありありと
踏みしめる小石の音も心地よく行くべき所にみちびかれゆく
デジャブああいつか見た景 屋根裏につづく回廊吹き抜けの階
わが裡の間に光を射し入らす苦難を越えたるひとの証しは
芯に神もつ語らいは夜更けまで炉の火にあかく照らされながら
手足伸べひのきの風呂に今日ひと日閉する平穏感謝に満ちて

高尾恭子 歳月

・大

竹下妙子 初春

・霧

深煎りの珈琲かおる純喫茶ぎぎと重き扉をひらく

マスターの蝶ネクタイは変わらないビル・エヴァンスのながれる茶房
赤すきるチエリーがひかる思い出し笑いのようなプリンのうえに
聞き慣れぬ病名たまわる六歳のキミの作った電車をのぞく
泣きやんだ母はようやく手をつなぐNゲージ模型を離さぬキミと
校庭の門扉をこえてまっしぐらキミの視線は光をはしる
ランドセルの中は空っぽひとつずつノートをすべて大人になった

高津砂千子

モンステラ

・風

四十年前の長崎大会にはじめて会いしモンステラなり

モンステラ広葉に穴のあきたるは特長なりと本に記さる

モンステラと知り旅終え即求む 濃きみどり葉にゆたかななる日日

株分けをせしモンステラはらから的新築祝いにふさわしきかと

子の妻に頼まれ再生なすためにモンステラまずじっくり眺む

枯れし葉と氣根除けばちからなき広葉残りぬ十二、三枚

丁寧にモンステラの葉を拭きながら声かけすなり「ありがとうね」

滝田靖子

防衛

・新

線香の匂ひかすかに混じりて誰を弔ふ風吹き行けり

防衛といふ名の武装国民は何に自覚を持てと言ふのか

復興のために納める税金を武装に使ふと簡単に言ふ

無抵抗に死ぬことにしようなど言へばちまた殺されうな日本

何故に殺されるのかもわからないままに死にゆく理不尽のあり

攻撃は最大の防御とうそぶける専守防衛便利な言葉

節電を促されてるこの冬の寒寒と青きイルミネーション

「韓国岳」を越えし陽射しにつらつらと椿の若木光りてゐたり

小蝶らはそれぞれの命終へたらむ風すさぶ野に姿を見ざる

玉葱を微塵に刻みしばたたく何に騒だつ心かなしも

栓しめてのちに零する水の音吾がゆく道の音なりしかも

くれなるの楓もみぢに身を晒しわたりてゆかな生死といふを

つむじ風けやき落葉を巻き上げて信号待ちの吾に向きくる

⊕に十の字の祖母の短刀幾世過ぎ土の底ひに朽ちてをらむか

田土成彦

埋め田

・宙

梅田とはどこかと地方の人は聞く大阪駅前と言へば納得

梅田とは埋め田に異字を当てただけ掘れば遺骨のざくざくと出る

無常とは滅びに向かふ時でなく栄華に向かふときにも使ふ

極まれば落ちるほかない理に歴史はいくつもの遺跡を残す

コロナよりコロナ禍で命縮めたる人あまたありもう三年目

接種後に亡くなつた人もあまたて閑運性は不明とのこと

超過死亡の異様に多い時期があり何かを始めたときと重なる

田土才恵

水切り石

・宙

吹きすさぶ波止場に並ぶガントリークレーン沈む夕陽を直線に裁つ

きりきしに冷たき形うち並ぶガントリークレーンの風をうならせ

日の射せる水面に跳ねる水切り石はねて昨日の現を散らす

沈まざるままに跳ねゆく石の面沈む夕陽を一瞬反す

のろのろと歩く龜虫もしかして林檎の箱に旅し來たるか

オルゴール時計に耳を澄ましたる幼き孫も乙女めく春

贈られし日は過かなり諸々の時を刻みてオルゴール鳴る

玉井綾子

見切り品

・羊

仲西正子

木耳

・沖

母は胃の沁む職場から子は思い通りにならぬ友から帰る
職場での辛さを言葉にしてみればとめ、はね、はらいが己に刺さる
ハロウイーンスウィートというさつまいも霜月初日に見切り品となる
グラグラとたぎる湯の中ブロッコリーの頭を二分押さえつけ居り
氣を遣い擦り減りし影の十日間休み後は縁取り戻る
秋の陽にナンキンハゼは赤みどり黄の多様なる心を生せる
四十歳より前に辞めた先輩は迷いを削ぐごと歯を磨きたり

中島央子

鉤針編み

・森

父母のほひ薄れし古里のかぐの木の実や両手に囲む
この夏の暑さに耐へし渋柿を正月用にねんごろに剥く
とめどなく降りくる銀杏の並木道再びはなき時間のあはひに
自転車に二人子を乗せひとり負ふ女性の後ろ姿只ただ眩し
会へざれば会はざるもよし今年最後の大き満月
駅に会ひ駅に軽く手を振りて別れし人のその後を知らず
亡き姑の鉤針編みの衿巻に冷えやすきわが肩の辺ぬくむ

永塚節子

友へ

・銀

めぐりから大切な人一人逝き令和四年師走に入りぬ
友の墓にあふるるほどの香の花供えて帰る明日大晦日
まぎれなくここに居ませりあの笑顔あの声を持つわれに語り来
とつくにの友へ送る新年のメールに乗せて互みの平穏
励ましは一切ならず病む友へ送るメールの言葉を選ぶ
たまわりしシクラメンにたっぷりと水を注ぐ陽だまりの中
おだやかな卯の年願い振る土鈴福は来ずとも難を軽ぜよ

しとしとの雨にショパンをきいている木耳たちのこの柔らかさ
桜また榕樹の精を吸い取りて植える木耳それぞれの肌
いくたびの雨に濡れつ木の精を吸い取り太る木耳をいただく
晴れた日が続けば声かけ水をかけおこしてやりぬ庭の木耳
晴れた日は何も聞かずに眠りたり木耳たちの閑かな時間
上空に轟音が来て目を覚ます固く閉じたる庭の木耳
物多く持たず物持ちよき暮らしそれもよけれど歌ことば欲し

白子れい

お詣り

・洛

平安神宮にお詣りすませ境内の小屋に入れば人ひと人よ
神宮の何年ぶりかの文芸展見物人のあふれ居りたり
壁ぎわを埋めつくして並べある扇子に短歌はたまた俳句を
大きなる扇子にきれいな絵の書かれ吾の昔の短歌書かれあり
舞妓さん四人の真中に佇たされて写真とるとう吾はふだん着なり
舞妓さんと写真とるならお洒落して来しにと思うもあと祭りと
お詣りをすませ充たされ帰る道こころも身体もはずみでござり

ばかりようこ

胸あつく

・鹿

めいちゃんが 赤ちゃんに選ばれてママになった 二〇二三年八月二十四日
四歳児の可愛いおででピアノ弾きし あなたがママに…胸あつくせり
「園児」ちゃんとお名前ついた ババ ママにまるやかな腰きを選んで貰えた
魚心はた 水心さり気なく人生上に遊ばせたるも
彩雲は裸木を透しただよえり木にかかりたる羽衣とし しばし
銀髪をかき上げにつシャイに笑む 大正時代の「モボ」の風情の
窓を開けたればファと目が合いぬカマキリの蒼さまなこのふたつ

浜谷久子

「共栄号」

・地

藤田美智子

木守の柿

・新

二時間をかけて我が家へ青年はナショナル自転車「共栄号」で
年一度解体整備するという昭和の自転車十七台を
皮トランク柱時計の磨かれて若者ぐらしに役割はたす

画家の描く昭和の建物そこに居る人はほかでもない彼自身
個展に観る明治昭和の建物の中から「長浜駅舎」を選ぶ

秋晴れを画家の愛車の自転車に括られて絵は搬入される
玄関に掛け替えられて白色の「駅舎」がわが家の古さに馴染む

檜垣美保子

雪

・昇

ミント味のガム噛みながら鼻腔からさびしさのもれ息とめてみる
三階の窓にはげしく雪の降り沈む時間をみるととき夜

路地裏に風吹きつけて行きどまり網戸に雪の森は描かる
少年にならい小さきゆきだるま三つめを置くポストの上に

五十年前のむかしへひとつとび教師のことばを腑分けする女子
死者は死を境に消えゆくものでなくこの頃聞いたことばかりなり

さざなみがさざなみを誘いしろがねの水面に柳の落ち葉散りこむ

福田庸子

青き肌

・今

新しき朝は野兔後ろ脚の蹴りの強さを雪に印すを
青き肌透き通る身に年越せるバッタと共に正月歌会

裸木の果ての満月照らす界は駆さにすがるを厭きぬ國をも
二筋の飛行機雲ゆく果たてには雪を迎へし山つらなれり

古墳かと見まがふ残土頂きに草を茂らせ田を冒しゆく
額にはビーズの飾りきらめくを女性騎手乗せ調教の馬

屋内の砂場めぐる訓練を素直に応ふ歩駆歩

・地

藤田美智子

木守の柿

・新

〈こんな日もあるよ〉こんもり雪のせてぶら下がりをり木守の柿は
ぼた雪の落ちくる夜は大杉の鼓動はつかに速くなりむ
ほどよき距離に解き放たれてゆく心冬木の枝の空に広がる
ささいなことに傷つくところわれに似る息子のセーター譲られて着る
元どほりの仲にはもはや戻れない窓一面に闇の貼りつく

〈攻撃されさう〉といふ曖昧を見逃して初詣の列どこまで続く
デモの列より抜けて小暗き路地に入る夢なりシユブレヒコールの消えて

藤森巳行

安らかに

・銀

年取ると疾風のごとく一年が過ぎてゆくなり今日大みそか

一族と正月の御膳囲みをり昭和平成令和を生きて
鏡見て諂ひし日を思ひ出すこの頃親父に似てきた我なり

稻束を父に手渡し脱穀を手伝つた我十五歳の秋

安らかに眠りなさいと妻は言ふたつた一時間昼寝の我に
冬の陽が木立を染めて落ちてゆき家路のメロディー街に流れる

胸中の渾んだ我を吐き出しう大きなくしゃみ三つ四つする

船田清子

ブーゲンビリア

・天

「ヒイ・ヒイ」と鳴くは鶴にやなにゆゑに「いいよ・いいよ」と鳴かぬ今年は
夕暮れをほの香るあり終の蓄あまたが塩豆めきて

核焼る共産国に惑はされ非核・不戦の誓ひやいづこ

核の悲惨体験持たぬ世とならば平氣で核に頼るやも 日本

三年も居座り続けてコロナ菌草津の湯を恋ふ夢碎きたり
光熱費高騰の師走はやっぱやと寒波襲来 着ぶくれてゐる

寒風に吹きさらされつづアーベンビリア真紅の笑みをなほもたやさず

牧 雄彦

枇杷の花

・大

松永智子

にひどし

・嵐

大学のキャンパス沿ひの枯れすすき夕日に光り秋去らむとす
構内の石畳の道黄に染まり銀杏落葉を吹く冬の風
方丈の裏なる庭に燃えかかるもみぢ葉かの世もかく暖はふや
寺庭の帯の掃き目に冬の日が斜めに差して世は静かなり
昨夜降りし激しき雨に瀬の音の響きて魂の吸はるる思ひす
夕暮れの川辺に生ふるすすきの穂見上げて二羽の鴨は動かず
木枯らしにうち震へる枇杷の花やがて大きな実を育まむ

松浦禎子

トスカーナの夜

・羊

思い出のイタリーハチ公前に
ワクチンの四回済むをまず宣りて三年も待ちしよ何を今更
ビル四階居酒屋風の暖簾あげおしゃべり上手鍋を開みて
老人の範ちゅうに入りて二十年未だもうれし遊ぶ醍醐味
ボンジョルノイタリーハチ公の旅の仲間たち台風予兆の夜の更けるまで
トスカーナの満月の夜の胸のうちささげ持ちたる命ありたり
癌告知つけたる我をいざないて旅を共にするあればこそ

松瀬トヨ子

尺取虫

・沖

尺取の尺とるように杖に歩をたしかめて行く梯姑咲く道

台風に揉まれて転ぶ青バヤ悔し涙か白き血流す

ケア室にバイタルはかる実習生耳たぶの巻貝小さくゆれる

朝影の中にゆうな花みちてケアルームの庭は夏色

百歳長寿の時代と言えどケア室は体の不自由なげく人集まり

山一面美らちゅらと香る伊集の花彼方辺野古は錆色の海

リハビリは坂に車を押す」とし越冬へラサギ漫湖に憩う

玄関の間に夜毎ともりたる大き蛍火待つとなく待つ
夜半目ざめ見るとなく見る玄関の間に青し蛍火ひとつ
かなしみてこぼしことばかなしみてかへることばのあらずにひどし
もの音人の声のなき間に蛍火ひとつともる夜のふけ
入りて来し蛍追ひかけ音をたて叩き落としてそのままの間
キッチンのタオル茫とどもりるし蛍火ひとつ來ずなりし間
間の夜は目覚めしままにさりながらさりながらをくりかへし言ふ

三浦好博

先制攻撃

・銚

「敵基地の先制攻撃」ああ昔でパールハーバーその後の惨禍
国会は要らない国の運命は閣議が決める昔でと同じ
ウクライナを国際社会は支援する先制攻撃せぬ理がありて
どうやつて戦争するかばかりなり武力で平和はやつては来ない
反撃を考へぬ先制攻撃にああ原発の五十七基は
増税か国債かではないんだよ専守防衛か否かだよ
これからは手術などせず重病に絆創膏にて我慢をせよとや

三木まり

幻

寒い日の魚たちは水底で何を想うか何を歌うか

北の空、西の空の雲のさま冬の大気が物語りする

息絶えて魂は抜けそのからだ見下ろしている雪の原野

真夜中にあたたかな涙あふれきて淡くやさしい夢を見ていた

まぼろしの母の声は柔らかく昔話の結末は宙

北国の早い日暮れに狐の仔母を探すか森に消えゆく
ちちははが共に暮らすこの胸の灯りは絶やさず灯しつづける

宮本 靖彦

明石海峡

・凌

茂木 城

知らぬ花

・埼

半ば来て医者今日休みと氣づきたり帰れば妻の挨拶が待つ
外通る子どもの声に見上ぐれば師走天心に半月のこの
雄弁に笑ひし友が耳遠くあいまいうなづき不理解の慘
千人が食ぶる関大大食堂我が家にはなきこ馳走ならぶ
学食の鉢わたしゆくをばさん等子どもをあやす顔をしてゐる
千人の学食仕切る支配人「着席二十分交替」を告ぐ
連絡船に暫しの旅情をたのしみし明石海峡一瞬に過ぐ

三好聖三

歳晩へ

・伊

四五枚の銀杏の葉っぱが落ちて乾いて白きベランダの上
風に舞う銀杏の葉っぱを追いかけて口に銜えて猫らがさやぐ
はて、どこに銀杏の木はある四五枚の落葉の出どこを探すしばらく
あああれだ、あの木だきっとと得心の男は戻る猫さやぐ家
猫たちが落葉を銜えて戻るとき葉っぱ貯金と妻は言うなり
ごはん粒ひとつを頭に付けたまま眠りに入りし猫牡三歳
歳晩へ向けて樹を伐る草を刈る畑を庭を整えるため

御代田澄江

結婚飛翔

・茨

土井たか子氏の賀状と香川進先生よりの賀状大切に持つ年経れど尚
ポッキーかプリツ撒きし如尻尾上げ空高く並みて秋津の結婚飛翔
揚羽の幼虫の青虫に喰ひ尽くされ丸坊主となる庭の梶子
英國土産と息子くれたるロゼッタストーン模型本体め人類の歴史解説か
真昼間の轟音空を領す戦闘機百里基地へと戦争準備は頗ひ下げに候
ロシア軍撤退と聞きし深夜便に世界や明かるむやヘルソン市から
「残り少ない学園だから」お弁当やめ友達と学食と孫
歌の文句の様に言ふ

知らぬ町の知らぬ寺にて知らぬ花目にせしが知らぬままに去にけり
見し花を知らぬままには捨ておけずシユロガヤツリと帰宅して解く
足にきしガタにあれほど好きだつた山歩きのこと反応悪し
八十歳過ぎて本格自由人恩かな足にボッヂ旅する
朝日杯レース結果は十二位も馬名の愉快「ドンデンガエシ」
ルメールの騎乗にこれもまた愉快七着にして「オオバンブルマイ」
蔵元の軒に下がりし杉玉の緑を飾る注連縄もめでたし
もとむらしげと おもいで そ

笛舟が小さき水路を流れゆくうち若き母の背中のぬくみ
軽トラを駆りゆく母の助手席に夕日と風を浴びて座れり
母に手をひかれてゆきし毛糸屋に母が頼みしづがカーディガン
母と来てレンゲを刈りし春の田に今は許されて農夫とならず
牛にやる草を刈りつつ集落の人のうわさを母より聞きぬ
あの人とつきあうべきかと問う母に「論語」を教えし十八の夏
夏季休暇に「娼婦の部屋」を読みおりし二十歳の我を母が咎めぬ

久我田鶴子

かけら

・羊

東京湾かけらのやうに見えながら停泊中の船のいくつか
ぎんいろに光るかけらの海のさきふ大島がはつきり見える
ビルの間にひかつて見えるきれぎれをそれでも海と呼びてゆふぐれ
みづからの歳を問ひつつ長生きをおどろく母よ 日差しがゆらぐ
ウルグアイのセーターを着たつぶりと譲られてからだ護られてこころ
あくがれは吟遊詩人スナフキンうたひすぎゆく風のヴィオロン
マスクの上の目玉ぐりぐり見開きて空ゆくものの航跡を追ふ

老いの手習い

林 耕作

書いたされた歌

初舞台仕舞で迷いし足運びはるかに遠い幽玄の世界

疲れたとこぼす家内の横に立ち料理手伝いたちまち口論

奥様に習いし調理押し付けず教えられたな料理教室

まだ孫に負けるはずなしその意気は駄菓子の包み破れず挫ける

スイミング教室の子ら元気よく泳ぐ水圧押されよろめく

娘にと三十年前用意せし洋食器セット皆もてあります

生垣を越えて朝日が庭の葉の露をきらめクリスタルとす

突いては落とす柿の実まだ青く急ぐなスズメ甘いのを待て

干し布団叩けば柿を突く鳥バッと飛び立つ茜の空に

ドライブでよく来た温泉今はバス視界異なり初の地のよう

月愛てる露天風呂に家族連れ賑やかに来て虫は鳴き止む

霜月にモミジ並木はまだ青く輝く赤はハナミズキの葉

慣れぬ筆 賀状で衰え見せるまい力込めばハネ飛び回る

短歌は数年前、職場OB会で強引に誘われて始め、「地中海」には令和四年四月、入会させていただいた新参です。

「歌は感動をうたうもの」というのに感動なんぞとんと記憶にもない愚鈍な私にはやはり歌は無理だと思っていたとき、永田和宏氏が著書『作歌のヒント』で「日常のなんでもない事物を面白がって詠んでみては」を目にしホッとしたことでした。

一方、このような私でも最近心を揺さぶられる二首の歌を読む機会がありました。一首は河野裕子氏の「手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が」。亡くなる前日に、なお切ない気持ちを短歌に託しておられます。

もう一首は岡野弘彦氏の「己が身のほろぶる日まで詠みつがむ調べすがしきやまと言の葉」。九十七歳の今も日々歌を詠まれています。心搖さぶられたのは二首とも生きているうちは最後まで詠い続ける意思の強さが表れていると思ったからです。

我が同輩は集まればすぐ認知症が話題になる年代、よし! 私は下手でもあの世に行く直前まで歌を詠み続けるぞ、と大いに奮い立たされました。

今月の二人

歌と友だち

熊谷 操

はじめの一歩

方言を解らぬ言葉と指摘するいつからあなたは標準語な

幼き日姉とそろいの服を着てお出かけするは母の趣味なり

「物事にグレーがあつていい」と父 黒白だけの私を案じ

耳の奥季節はずれの蝉が啼くミーンミーンと騒ぎすぎだよ

顔あれて風呂そうじなし指あれて洗い物なし夫はいそがし

満月は餅つきの日か日本から見える宇宙にうさぎの館

たずね人防災無線響きたり明日は我が身と無事を祈りぬ

三時間は近いか遠いか孫たちのお土産積んで秋の松江路

政治家は何を良しとし世襲する思いとどまれわれらのために

「忘れたの」「仕方無いわよ」娘と私いや遠き日の私と母

若づくりした人を見た急いで我が身を見なおす よし大丈夫

霜月の寒き夜更けに蚊が一びき私を起こし詠もうと誘うや

てんでんこ寂しき言葉さにあらず命をつなぐ思いやりなり

「今月の二人」にお誘い戴き、ありがとうございます。
書き出しからこんな話で申しわけないけど聞いてください。

私の所属するボランティアグループ定例会で、いつも私や他の広島育ちの人の広島弁を指摘する人がいます。それが耳につき浮かんだのが最初の短歌です。腹立だしさはこれで表せると閃き、紅風グループのお一人に「入れてください。」ではなく「私も入る。」と勝手に入会しました。幸いにも高津先生やメンバーのみな様の大きな懐が勝手な私を受けとめてください、正式に入会させてくださいました。

入会後に浮かんでくる短歌は、不思議と心やさしき短歌が多くなりました。自然を感じ、絆を感じ、心やさしき日々を歌会のメンバーに支えられ過ごしています。

一首も一句も区別できず「一句できた。」「ちがうよ、一首ね。」と言われ、「そうだった。」と気がつく未熟な私ですが、紅風の皆様、地中海の皆様よろしくお願ひします。

生垣を越えて朝日が

林さんは、大阪市在住。強引に誘われて始めた短歌というが、現在は最期の日まで詠み続けると奮い立たれている。

疲れたとこぼす家内の横に立ち料理手伝いたちまち口論
疲れたと言う妻を気遣って、料理を手伝おうとしたものの、すぐに口論になってしまったという。せっかくの気遣いもトホホの結果であったようだ。「妻」と言わず、「家内」と言うところには年代や人柄が滲んでいる。

まだ孫に負けるはずなしその意気は駄菓子の包み破れず挫ける
「負けるはずなし」と二句で切れ、「その意気は……挫ける」と続く。このテンポ。笑いの壺を知っている人だ。それにしても、まだ孫に負けるはずないと思っていたのに、駄菓子の包みも破れないなんて。これまたトホホの結果であった。

・スイミング教室の子ら元気よく泳ぐ水圧押されよるめく
スイミング教室の子らが泳いでいる傍らで、林さんも泳いでいるらしい。ところが、子ども達が元気よく泳ぐもので、その水圧に「押されよろめく」のであった。四句目は、「水圧に」と字余りになつても助詞を入れた方が良いだろう。

・生垣を越えて朝日が庭の葉の露をきらめくクリスタルとす
「生垣を越えて朝日が」と始まつたところ、朝日が生垣を乗り越えてくる感じで勢いがある。そして、その勢いのまま庭の葉についている露をクリスタルに変えるのだ。朝日はマジシャンであった。トホホを楽しむ林さんの、別の面を見させてくれた歌。ところで、この葉は、何の葉だったのだろう。

評者：久我田鶴子

熊谷さんは、広島県廿日市市在住。ふだんは広島弁で話されているのだろう。

方言を解らぬ言葉と指摘するいつからあなたは標準語な方言を解らない言葉だと言う人がいたらしい。その人に異議を申したいのである。指摘するあなた、あなたはいつからと繋がるように、四句目は「あなたはいつから」としては？
・「物事にグレーがあつていい」と父 黒白だけの私を率じ
熊谷さんは、物事に白黒をはつきりつけたいタイプのようだ。
「物事にグレーがあつていい」とは、その性格を察した父が言ってくれた言葉。それは、いつ頃のことなのだろう。どういう場面で発せられたのだろう。具体を知りたくなった。

・三時間は近いか遠いか孫たちのお土産積んで秋の松江路
廿日市から松江まで、車で三時間。近いとも遠いとも言えない微妙な距離かもしれない。でも、孫たちへのお土産を積んでの秋の路ならば、きっとその道中も楽しかったことだろう。
「孫たちのお土産」は、「孫たちへお土産」かな？
・「忘れたの」「仕方無いわよ」娘と私いや遠き日の私と母
「忘れたの」と言う私に対し、「仕方無いわよ」と言う娘。歳を重ねれば、物忘れだってするようになる。それを娘は勞り、慰めてくれる。この光景、どこかであつたなと思えば、「遠き日の私と母」であった。「いや」と入れて、下の句に続けるところが巧みだ。この読みで違つてないのなら、「私と娘」「母と私」とした方が良いと思うが。それから、「忘れたの」「仕方無いわよ」は、広島弁ではどう言うのだろうか？

私は宮城県仙台市の街なかで育ちました。

昭和二十年代、太平洋戦争が終わり日本は焼け跡から再起する気運がみなぎっており、仙台の中心部に大きな道路が造られていました。舗装前の道路はでこぼこで雨が降ると大きな水たまりが出来るのでした。その水たまりを見ると大きな青い空が映っています。その中に私はいろいろな物語を作つて遊びました。

小学四年の頃、学校で百人一首かるたが流行し、皆で坊主めくりをして大いに楽しみました。家に帰り、さっそく親に頼んで百人一首かるたを買ってもらいました。家族でかるた取りをするのも楽しいのですが、だんだんに歌の意味が知りたくなり、古本屋で百人一首の本などを買ってひそかに勉強してゆきました。それ以来、国語の時間が楽しくなりました。

特に詩が好きで、ヴェルレーヌの「秋の歌」やカール・ブッセの「山のあなた」に傾倒していました時期もありました。

高校時代になり、古文の授業が本格的に始まるとき短歌が再び身近な存在になりました。今振り返ると高校の古文の先生方もとても情熱的でした。先生自身が古文が好きで仕方がないという印象で、私は一人生徒

として憧れを抱いていたと思います。

その頃になると大変興味ひかれた歌人として与謝野晶子がいます。『みだれ髪』明治三十四年（一九〇一年）の刊。まだ晶子が独身の歌でそのほとんどは後に夫になる師、与謝野鉄幹への思慕に彩られています。あの封建的な時代にあって、自分の心をみ隠さず歌にして世の中に出すという思い

私と短歌との出会い

247

熊谷とも子

るほど歌も胸を打つものとなります。

宮城県の歌人で原阿佐緒という女性がおられます。女優としても活躍した美人ですが、与謝野晶子の影響を受けた歌を数多く残し、アララギ女流歌人と見なされた時期もある人です。今宮城県では「原阿佐緒賞」の募集が毎年おこなわれています。

数年前になりますが、原阿佐緒に惹かれ私も応募したことがあります。それは生まれて初めて自分の作った歌を世の中に出した瞬間でした。

それからしばらくして、友人から短歌の会への誘いがあり、とても興味をもって見学に参りました。そこで、先生の笑顔とユニークな語りに魅了され、その場で入会を決めたのでした。数年間、師の佐久間晟先生、そして「ぶな短歌会」の仲間と短歌を学ぶ中で、生活の所作やものごとの常識に至るまで向上したように思います。

一生の中でこんな幸運はそうはないと思いません。いたいたこのご縁をこれからも大切にしてこの道を一日も長く歩みたいと思っております。「地中海」の皆さま、どうか今後とも宜しく、ご指導くださいます。

よくお願い申し上げます。

きり。歌人はかくありたき、と私は思うのです。

いま、「地中海」に身を置く者となり、昔の私を振り返ってみると、私の心の底にあるのは、常に「あこがれ」であると言えます。どちらと云うと、女流の歌人の情熱にとても心惹かれます。その生きざまと共に歌があり、生き方が情熱的であれば

春のアンソロジー <光と陰> 金近 敦子

たんぽぽのぼぼのあたりをそつと撫で入り日は小さきひかりを收ふ

どんなひとと聞かれて春になりゆくと春は顕微鏡が明るい

河野 裕子

研究室でバッハひそかに奏きたりき知る人もなく停年となる

吉江 久彌

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

紀 友則

願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ

西 行

ほろびゆく炎中の桜 見てしより、われの心の修羅 しづまらず

岡野 弘彦

鬼房の「鬼」より「房」の恐ろしき春の夜の闇ふくらみてくる

伊藤 一彦

瓶に挿す藤の花房一房は重ねし書の上に垂れたり

正岡 子規

読みかけの一冊をわれに残したる夫の時間を葉が区切る

檜垣美保子

幽かなる鈴の音の」とゆらぎをり春立つ空のアルデバルンは

浜田 昭則

・たんぽぽのぼぼのあたりをそつと撫で入り日は小さきひかりを收ふ

『歳月』 河野 裕子

「たんぽぽのぼぼのあたり」とは、何処のことだろう。不思議なことに、それは

「綿毛」の部分だろうと、誰しもが思う。

「塔」の永田淳さんは、「この歌のオノマ

トベに近い五感の普遍性に「一首屹立」を

見て、河野裕子代表歌五十首にも遊び、歌

集『歳月』で作者がこの歌を補足するよう

に説明的な歌を直前に置いていることは、

「(不必要で) 気に食わない」と評された。

一首でも、一連でも美しく、静かな「時間」を内包する歌だ。

・どんなひとと聞かれて春になりゆくと春は顕微鏡が明るい

『春の顕微鏡』 永田 紅

優秀な研究者にとって、顕微鏡という相

棒はモノを超えた親しく懐かしい存在の

ようだ。作者は、若い女性研究者。

良縁を得て、周囲の問い合わせに答える度に、

「顕微鏡が明るい」春の光の中で、「幸せ」を実感されている。

「春は」の助詞「は」が、力強い一首。

・研究室でバッハひそかに奏きたりき知る
人もなく停年となる

・ほろびゆく炎中の桜 見てしより、われ
の心の修羅 しづまらず

・読みかけの一冊をわれに残したる夫の時
間を葉が区切る

【虹の断橋】 吉江 久彌
ロマンチストの老研究者は、斎藤茂吉に
歌の薫陶を受けた人で、茂吉の「のど赤き
つばくらめ」の歌の「赤」は、口を開けて
親を呼ぶ雛鳥のどの奥の赤い色だよと、
教えて下さった。

「時の区切り」を「上句下句の句切れ」
に重ねることに成功した見事な一首。
・ひさかたのひかりのどけき春の日にして
心なく花の散るらむ

【古今和歌集】 紀 友則

紀友則は『古今和歌集』の選者の一人だ
が、その完成を待たずして亡くなっている。
永遠の時の中に、散る桜の「光と陰」を
活写し、封じ込めた名作。

・願はくは花の下にて春死なむその如月の
望月のころ

【山家集】『続古今和歌集』 西 行

西行は北面の武士を辞して出家、旅に生
きた。旧暦二月十五日の満月のころ、积尊
涅槃の日に合わせて、美しい桜の下で死に
たいものだという、晩年の西行の願いの歌。

【病床六尺】 正岡 子規
私と短歌を結び付けてくれた最初の一首。
以来、昼間の藤の美しいむらさきと、古い
書物の対比を思つて来たけれど、夜の枕元
の藤を思う人も多いのかも知れない。

【岡野弘彦全歌集】 岡野 弘彦
『岡野弘彦全歌集』は、極めて美しい装
幀の歌集だ。渴いた土のひび割れを再現し
た外箱に収められた漆黒の一冊からは、美
しい歌の芽が出て花開くのを感じさせる。
ただ、岡野さんの桜へのスタンスが、西
行のように「癒し」となるには、数十年を
経て尚難しいのかも知れない

・鬼房の「鬼」より「房」の恐ろしき春の
夜の闇ふくらみてくる

【待ち時間】 伊藤 一彦

「鬼」「房」の意味は、何なのだろう。
「待ち時間」の季節に立つ作者は、このユー
モラスな一首の謎掛けで、一息入れている
ようだ。

・瓶に挿す藤の花房一房は重ねし昔の上に
垂れたり

【暗黒物質】 浜田 昭則

宇宙への憧憬を科学の視点から詠まれる
ことの多かった浜田さんは、「地中海」に
とって、とても大切な方だった。大量の文
献と、毎月の「地中海」のすべての歌をイ
ンターネット配信して下さっていた。突然
の逝去が、今も、とても惜しまれる。

「アルデバラーン」は、おひつじ座の最も
明るい恒星。立春の空に、光を届けてくれ
る。

今回、春のアンソロジーとして、長い
「時間」を内包しつつ、一瞬の「光と陰」
を見事に捉えた十首を選ばせていただいた。

作者は、亡き夫の遺品となった一冊の読
みかけの本を手にした瞬間、一本の葉が区
切るふたつの時間、その光と陰、重みに気
付かれたのだろう。

細い葉を「結界」のように感じてしまう
程、深い悲しみが、そこに在る。

・幽かなる鈴の音の「ことわらぎ」をり春立つ
空のアルデバラーンは